科学技術立国を支える優秀な人材育成に一役

富士通は数学オリンピックと情報オリンピックの2大会の協賛をしている。人材開発担当役員として、この活動を支援している常務理事／人事本部副本部長の梶原ゆみ子さんに、支援の意義や、若い人たちへの期待について話を聞いた。

梶原（かじわら） ゆみ子（こ）
富士通 常務理事／人事本部副本部長（人材開発担当）

「あってよかった」と思われる企業でありたい

科学オリンピック7教科のうち、富士通が支援しているのは数学と情報の2大会です。数学は1991年から、情報は2006年から、国際大会に向けた日本代表生徒の選考会で、成績優秀者に副賞としてノートパソコンを提供しています。情報通信技術（ICT）分野の企業として、数学と情報はとても重要な分野ですし、若い人材を育てることは企業としてのミッションと考えています。国際科学オリンピックは、優秀な若い人たちが切磋琢磨（せっさたくま）し合い、グローバルな体験ができる機会です。そのような場を支えることは、とても意義深いことです。

科学オリンピックの協賛をしているからといって、売り上げが増えるといった直接的な効果は発生しません。大会に出場している選手たちにどのように映っているのかはわかりませんが、科学オリンピックへの協賛によって、富士通という会社が数学や情報の分野に高い関心を寄せていることを示すことができればいいと思っています。何かの折に、「富士通が数学や情報の大会に協賛していた」と思い出してもらえるだけでも、私たちにとってはうれしいことです。企業も社会の一員ですので、社会的な存在価値を作り出す必要があります。多くの人に「あの会社があってよかった」と思ってもらえるように、さまざまな形で社会に貢献しています。科学オリンピックへの協賛は、その一環です。

今の時代に求められる人材

私たちの活動領域であるICT分野は、今、急速に発展しています。10数年前は、ICTは一部のエンジニアだけがわかっていればいいという雰囲気がありました。しかし、現在はICTが社会生活の中に浸透してきて、誰もが使うようになりました。そのため、富士通では技術に直接関わらない部門の社員にもICTに関する基礎的な知識を証明するITパスポートという資格の取得を推奨しています。専門的な技術職だけでなく、全ての社員がICTをより深く理解することが求められる時代になっています。

これからはますます人材育成を強化し、日本の産業をグローバル化する必要があります。その観点からも、科学オリンピックに参加する生徒のように、早い時期でグローバルな立ち位置を経験し、自分の能力と向き合い、高めながら、広い視野で物事を見られる若者が増えることを、期待しています。

教育は一足飛びに変わりません。いわば漢方薬のようなものです。近年は国際科学オリンピックで、日本代表生徒が優秀な成績を収めていると聞きます。こういう若者の力をどう伸ばしていけるのか、社会は懐の深さを持たなくてはなりません。科学オリンピックの参加者たちが、自身の能力をさらに伸ばして、社会で活躍することをとても楽しみにしていますし、そのような人を1人でも多く増やせるように、企業は積極的に協力していくべきと考えています。